

小動物臨床の分野では、寄生虫性疾患やウイルス性疾患の予防が行き届くようになるにつれて、これまではあまり重要視されてこなかったアレルギーや免疫が関連した疾患を数多く目にするようになってきました。それら「新分野」と言っても過言ではない疾患に対する獣医診療の現状として、残念ながらこれまでに我々は対抗策をほとんど持っていない状態でした。そのため、これら疾患の病態の理解、その診断基準や検査方法、さらには治療法についての情報を発信することは、この領域の研究分野にいる人間としては急務であると考えております。

しかしながら、その発信は決して容易ではありません。犬や猫のアレルギー学・免疫学の研究者数や学術論文数は限られており、これまでの情報の蓄積も不十分です。また、学問としての進展も遅遅としており、我々が欲しい情報の多くを望めないのが現状です。そのため、提供できる情報の量と質が限られてしまい、臨床現場で十分に生かされるものが少ないことが現実でもあります。

そこで、このフラストレーションを解消するためには、ヒトやマウスで解明されている事象を犬や猫のアレルギー・免疫疾患の診療に応用していくことが得策であろうと考えます。当会は2007年の第1回目のシンポジウムより、基礎研究や人医学研究分野の先生方を講師として常に招聘することで、動物病院の獣医師の先生方のアレルギー・免疫疾患の診療に必要と考えられる情報提供を行ってきました。さらに、2012年からは毎回のシンポジウムやベシックスセミナーで臨床免疫検討会と称し、獣医学分野の研究者と基礎研究、人医学の分野の研究者の間での聴衆参加型公開討論会の場を設けてきました。このような動きにより、我々の分野において停滞していたアレルギー学・免疫学に一石を投じることができたのではないかと考えております。

今後も、このような情報発信と分野を超えた議論を活発に行うことで、当学会が獣医学分野におけるアレルギー学・免疫学の発展に寄与し、また動物病院の先生方の毎日の診療に、より有用な場になれるよう尽力してまいります。対象とする疾患が複雑であればあるほど、提供しなければならない情報が多ければ多いほど、これからの私どもの責任も重くなってくることを肌で感じております。会員の先生方のご協力なしでは到底、与えられた役割を全うすることはできないでしょう。今後ともご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしく願いいたします。

2014年1月

獣医アトピー・アレルギー・免疫学会
会長 増田 健一